

アクションしている「ひと」を通して、神奈川の個性と魅力を発信します。

人の心と東北を支える苗を育てる—進和学園「いのちの森づくり」リーダー遠山雄志(ゆうじ)さん

2012年7月2日

ライター: [宮島 真希子](#)

東日本大震災で発生した「震災がれき」を活用した森づくりのプロジェクト「いのちを守る森の防潮堤」(※1)が注目されている。

この事業は、青森県から福島県に続く太平洋海岸部 300 キロメートルに渡って防潮堤となる森づくりだ。「がれき」と言っても、もともとは住民の財産や暮らしていた家。このプロジェクトでは、震災によって「がれき」となってしまったそれらを土と混ぜ、防潮堤の土台に再利用する。木を植え育て、深く根を張る森を作り津波を食い止めるとともに、被害に遭った人の鎮魂を目的としている。

同プロジェクトは、「その土地に本来生えていた木によって森を再生する」という考え方のもとに進められている。これは日本だけでなく世界各地で 60 年に渡って植樹を続けている植物生態学者・宮脇昭さん(横浜国立大学名誉教授)が提唱する「潜在自然植生」という考えに基づく。

その「森の防潮堤」に植樹する苗木を育てている施設が神奈川県にある。社会福祉法人進和学園(平塚市万田、出縄雅之理事長)だ。

同施設は、障害者が働く就労施設など 14 施設を運営する社会福祉法人。主に知的障害を持った約 450 人の利用者が在籍している(2012年6月1日現在)。

主な業務はホンダ車自動車部品の組み立てだが、2006 年から展開しているのが「いのちの森づくり」プロジェクトだ。シイ・タブ・カシをはじめとする、約 40 種類の広葉樹をどんぐりや木の実から植樹用苗木をポットで栽培し、商品として出荷する。2011 年の出荷量は、約 2 万 8,000 本、売上は約 1,800 万円。現在も約 6 万本の苗木が育てられている。

「どんぐりグループ」リーダー、遠山さん。しんわルネッサンスで。

進和学園のこの苗木育成事業は、防潮堤の一環という目的だけでなく、地球温暖化防止や自然エネルギーへの転換の世論とも相まって、2012 年 3 月からこれまでにマスメディアから数件、取材をされるなど、同施設の中でも、高い注目を集めている。2009 年から同プロジェクトの担当として、事業に携わるのが遠山雄志(ゆうじ)さん(39)=伊勢原市=だ。遠山さんに、この事業の意義や自然にかかわる仕事が障害者にもたらす影響などについて聞いた。



「自動車部品の組立は、手順等のマニュアルが明確ですが、苗づくりの作業は自然が相手です。最初はなにかもが手探りでした」と当時を振り返る。特に、苦労したのは苗木の出荷時の選定作業。5 万本以上の中から、品種を見分けて選ぶ作業が非常に難しかったという。「見た目は似ているので、種類を見分けるのが大変です。出荷を間違えると信用を失いますから、とにかく慎重に行っていました。その甲斐あって、今はスタッフも利用者も多くの種類の苗木を間違えることなく選ぶことができるようになっていました」と話す。

現在、遠山さんを含めたスタッフ 3 人、利用者 5 人の計 8 人の「どんぐりグループ」が育成作業にあたる。苗木づくりは、秋にどんぐりを拾うことから始まる。苗木の種子となるどんぐりは、学園周辺の湘南平や高麗山など、平塚市の雑木林や公園、東海大学(平塚市)や愛宕神社(平塚市)などの協力を得て拾っている。

地元農家より借りている「どんぐりハウス」で育てられている苗木は、6 万本にも及ぶ主要などんぐりや種子を各種、約 1 万粒を目標に拾っていく。発芽し、苗まで育つのは年によって異なるが 6、7 割ほどにしかならない。このため、数多く拾う必要があるという。拾ったどんぐりは、冬の時期、育苗箱に種を撒き、ビニールハウス内で育てる。水やりや土の乾燥を防ぐことが肝要で、造園の専門会社エスペックミ

ック株式会社(本社・愛知県丹羽郡)やハウスの管理者の諸星孝恵さん(平塚市)の協力を得て育てている。無事に芽が出たものは、春～夏にポットに移し替える。

「潜在自然植生」の考えに基づく植樹は、緯度・経度による生態系が同じであれば、産地が違ってても広域に植樹できるという特徴を持つ。従って、平塚周辺で拾ったどんぐりによる苗であっても、県内外各地に植樹することができる。

春から初夏にかけては、植樹の時期。2～3年かけて30センチほどに育った苗を、神奈川県所有する湘南国際村(横須賀市湘南国際村)内「めぐりの森」など、提携している施設や山へ植樹するのも、同グループの仕事のひとつだ。

施設内工場での作業と違い、どんぐり拾いや植樹など、屋外での活動や他者との交流が多いことが同プロジェクトの特徴だ。「苗木作りの作業に従事し、利用者の表情が生き生きしているのを感じます」と遠山さん。特に、手塩にかけて育てた苗木が各地に根付くことは、作業に携わる人に誇りと喜びを与えているという。

「自信がつくのか、市民も参加する植樹作業の時には、みずから参加者に指導する利用者もいます。園外部の方々との触れ合いは、いい影響があるようです」というように利用者の心の成長と生きがいにもつながっているという。



しんわルネッサンスの斜面の森。2006年の植樹祭で植えた苗が立派な森に育っている。

遠山さん自身にもこの事業にかかわることで、環境に対する関心が深まったという。「もともと木についての知識があったわけではありません。光合成や森が環境に与える仕組みはわかっていましたが、それをどんぐりの成長を見守りながら、身をもって学んだことで、さらに興味がわいてきました。今でも宮脇先生の講演に多く参加し、本を読んでいます」と、学びを続けている。

このプロジェクトで使用する苗木づくりは、同じく「潜在自然植生」による森づくりをしている宮城県仙台市にある輪王寺の協力を得ている。輪王寺の呼びかけで、岩手県大槌町で植樹祭を主催した「横浜ゴム」など、社会貢献に力を入れる企業や団体などがどんぐりや種子を拾い集め、進和学園に送り、「どんぐりチーム」が苗木に育てる。

2012年3月、東北から同学園へ送られてきたどんぐり等種子は、10種類、約12,000粒にもなった。これらのどんぐり等種子は、2、3年後をめどに、苗木に育てて「ふるさと」である東北に返し、植樹するという。

「どんぐりグループが育てた苗木が、『いのちを守る森の防潮堤』プロジェクトに使用されることを考えると、とてもうれしく思い、やりがいを感じます」と遠山さん。今後苗木の需要増加を見越し、どんぐりグループのメンバー増員や、既に共同作業をしている県内の福祉施設との連携で、障害者就労支援を強化していくことも視野に入れている。

東日本大震災の復興と森の復活と障害者の就労の場づくり…。どれも長い時間がかかる取り組みだが、遠山さんに気負いはない。進和学園では7月14日に、苗作りの体験ができるイベントを開催する。「6年の時を経て森に育った、宮脇方式を体現している『いのちの森』を、是非見に来てください。いのちを守る苗木を一緒に作りましょう」と、市民に呼びかけている。(※2)

※1「いのちを守る森の防潮堤」プロジェクト

横浜国立大学名誉教授で、生態学者の宮脇昭さんの考え方「潜在自然植生」をベースに、東日本大震災で発生した災害廃棄物(がれき)などを盛り土に混ぜ、植樹して防潮堤をつくる構想。宮脇さんは震災以前より、その土地に本来の生える木々を混栽する「潜在自然植生」をもとにした「いのちを守る森づくり」を提唱してきた。震災直後の4月4日から被災地で調査を実施、いち早く「いのちを守る森の防潮堤」の必要性を指摘した。

このプロジェクトを推進するため、2011年7月31日に「いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会」

(会長・日置道隆氏、宮城県仙台市)が発足している。

※2 7月のイベント問い合わせは、しんわルネッサンス(いのちの森づくり担当:0463-58-5414)まで。

【関連記事】

震災がれきを活用し「いのちを守る森」をつくるー「4000万本の木を植えた男」宮脇昭さんの講演会が開催されました(平塚市):(かなマグ.net)

<http://kanamag.net/archives/36973>

▽リンク

ドンダリの「ポット苗づくり」イベント情報(株式会社研進ホームページ)

<http://www.kenshin-c.co.jp/news/event#4431>

いのちの森づくり～進和学園から世界へ～(進和学園ホームページ)

http://www.shinwa-gakuen.or.jp/works/inochi_no_morizukuri

いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会

<http://morinobouchoutei.com/>

カテゴリー: [ヘッドラインニュース](#) タグ: [平塚市](#), [森づくり](#), [植樹](#), [自然](#), [障害者雇用](#)

ライター: [宮島 真希子](#) [この記事のパーマリンク](#)